

# 生命とは動的平衡。 人間も細胞と同じく 他者との関係で生き方が決まる

青山学院大学教授 生物学者  
福岡伸一



Shinichi Fukuoka  
福岡伸一

ふくおか しんいち ●1959年東京生まれ。京都大学卒。ハーバード大学医学部研究員、京都大学助教授等を経て、現在は青山学院大学総合文化政策学部教授。「生命とは何か」をわかりやすく解説した著作を数多く著す。ベストセラー『生物と無生物のあいだ』ほか、『動的平衡』『世界は分けてもわからない』『フェルメール 光の王国』など著書多数。最新作『動的平衡2』は最新の遺伝子研究事情がわかるほか、生きる希望が湧いてくる内容となっている。1月20日に東京・銀座にオープンする「フェルメール・センター銀座」の監修もつとめる。(http://www.vermeer-center-ginza.com)

生物の体は細胞レベルで常に壊されながら新しく作り変えられています。このように絶えず動きながらもバランスを取っている状態のことを動的平衡といいます。私がこのコンセプトで皆さんに伝えたいことは非常にシンプルです。生物学的な視点では自己同一性や一貫性などは幻想にすぎないので、自分の内部を探しても「本当の自分」なんてものは見つかりません。それゆえに何にでもなれる可能性を秘めており、その将来は他者との関係性の中で決まっていく。それが本来の人間らしい生き方なのです。天命があると信じて自己実現を目指していくというキャリアデザインのモデルはそろそろやめた方がいいと思うんです。

同時に最近、遺伝子は周辺の影響を強く受けていて、遺伝のありかたにも柔軟性があることがわかってきました。遺伝子は私達を規定しているのではなく「自由である」と命じているようにも見えます。人生でもさまざまなきっかけがありますが、あらかじめ決められていることなんて何ひとつなく、因果律など存在しない。この世界は常に流れていて自由であるがゆえに希望に満ちているんです。